

経済建設常任委員会視察報告書

経済建設常任委員長 林 美行

1 日 に ち	令和3年11月1日（月）14時00分～16時00分
2 視 察 先	ギャラリー百草（東栄町2－8－16）
3 参 加 者	【委員長】林 美行 【副委員長】古庄修一 【委員】三輪寿子、柴田雅也、寺島芳枝、佐藤信行 【経済部長】長江信行
4 調 査 内 容	多治見市のこれからの可能性について （生活工芸のまちとは、陶磁器産業のこれからについて）
5 主な質疑の内容、所感、提言事項、課題等	東栄町で「ギャラリー百草」を展開する安藤雅信氏を訪ねました。雅信氏の魅力溢れる感性は、廊主としても作家としてもフルに発揮されています。現代彫刻作家としての活動時期を経て、今は日常使用のうつわを中心に、全国のギャラリーで展覧会を開催し、全国的な活躍をされています。ギャラリー百草での活躍の下、全国各地からの集客が実現し、工芸に道を見つけた若者が集まっています。これらの事実が多治見市のこれからの考える上で必要と考え、調査を行いました。 □<u>主な質疑の内容</u> 地場産業の可能性 桃山時代は輝いていたが、江戸時代以降は瀬戸物としてしか通用しなかった。明治期に西浦家により美濃焼として考えるキッカケはできたが、豊かな窯業原料と陶工たちの力で国内の焼き物の50%を超える生産量を持つ地域としてどんな商品でも作れる産地となり、大量生産という特徴を持つことになったが、生活様式の変化が持続可能性を低下させている。①セラミックバレー、リブランディングという取り組みは適切である。②この大きな産地をセラミックバレーリブランディングさせる仕組みが難しいのではないか。③地場産業という流れで、近世、近代に生まれた、川南や各陶産地のような歴史の中に生きている町があることが強み。④生活文化とつながるものと人がいる。⑤国際陶磁器フェスティバル、県現代陶芸美術館、意匠研究所等の各機関が機能している。⑥デザイン力が求められる。⑦営みのアーカイブ化が必要＝蓄積が急務である。⑧建築部門でのタイルの工芸品化に大きな可能性。など貴重な意見をいただいた。 □<u>所感</u> 地場産業には今後も大きな可能性があることを確認できました。生活をデザインする素材としての陶磁器は、文化芸術との融合の中で新しい可能性を持ちます。日本が得意とする工芸として世界へと。また、消費者とのネットワークを作り出すことが急務と考えます。

